

図 19 「8 の鹿-虎の爪」王によるアカテベックの
征服(ボードレイ文書)



注)真ん中の地名記号に矢が刺してある。アカテベックの王「3のわに」が補われた。

出典: Smith (1973a), p. 248, Fig. 51a.

ないし、最も重要な出来事さえも省略した形で描かれている。こうして絵の簡略さを満たし、しかも、はっきり解釈できる1つの方法が、この慣習的な描写ないし配置の使用であって、特定の意味を表現可能にしている。部分的には、これらの慣習は特定の記号よりよく知られている。なぜならば、その本来の性質によってすぐ識別できるし、その解釈にミシュテカ語の知識が必要ないからである。

ミシュテカ文字に使われているいくつかのシンボルと同様、絵画的慣習の多くも、ミシュテカ文書独特のものではなく、メソアメリカの他地域の石彫や壁画にも見られる。とくに、メキシコ渓谷や周辺のナワトル語を話す地域で作られた征服後の文書に見られる。たとえば、「征服」が矢を突き刺した場所の記号で表わされることは、言語に関係なく簡単に理解できる(図19)。16世紀のアルバラードのミシュテカ語-スペイン語辞典では、「征服する」を「他人の土地に矢を刺す」と定義している。これは、絵文書に見られる絵画的慣習を正確に述べたフレーズである。

男女の区別は、衣服と頭冠で識別できる。男女が向き合っている姿は結婚を表わし(図20)、同じ向きに座っていれば既婚を表わす。また、2人の同性が向き合っていれば会議を表わし、通常、地名記号はついていないが、一方の人物だけについていれば、他方の人物は訪問客であり、2人または2人以上の人間の会議は政治同盟を意味する。その他、年寄りが1本の歯だけで描かれていれば「歯がない」ことを示し(図21)、死人は綿布で包んだミイラ(図22)、または、閉じた目で表わす。髪をつかまれ細長い旗をもっているか、ローブにつながれている人間は、捕虜を表わす(図23a, b)。これらが絵画的慣習の主なものである。

【暦の日付の文字】最後に、暦の日付の文字について述べる。前述のように、人名はその人物の誕生日を祭式暦の日付で表わすが、1から13までの数表記が係数として日の文字の前につく。この係数は、古くは

図 20 結婚のシーン(セルデン文書)



注 左の「3の死-灰色の鷲」王と、右の「3の蛇-コアの花束」姫との結婚シーン。

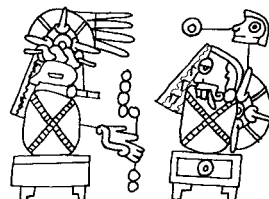
出典: Smith (1973a), p. 222, Fig. 7c.

図 21 歯のない人物の例(神官「10のとかげ」、セルデン文書)



出典: Smith (1973a), p. 224, Fig. 10a.

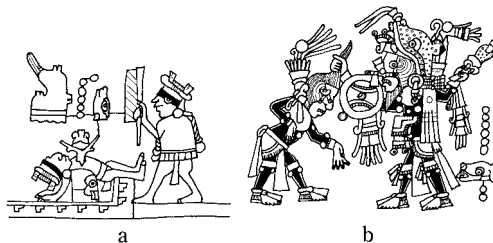
図 22 死者(セルデン文書)



注 左:「7の水-太陽の羽根」という女性、右:「1の猿-トラロックの太陽」という男性。

出典: Smith (1973a), p. 225, Fig. 14c.

図 23 捕虜の場面



注) a は、「6のとかげ-毛髪をまげた丘」という女性が捕虜となり、いけにえにされた(セルデン文書)。b は、右の「8の鹿-虎の爪」王が左の「4の風-火の蛇」を捕虜としている場面(ナットール文書)。

出典: a は Smith (1973a), p. 226, Fig. 15a.

b は Marcus (1992), p. 377, Fig. 1.13.